

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 20 日現在

機関番号：21301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2017

課題番号：26861929

研究課題名(和文)10代で出産した女性が母になるプロセス

研究課題名(英文)Process by Which Women Who Have Given Birth as Teenagers Become Mothers

研究代表者

坂本 希世 (SAKAMOTO, Kiyo)

宮城大学・看護学群(部)・助教

研究者番号：70723980

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、10代で出産する女性が産後一年間の育児を通じて母になるプロセスと、育児中に抱える困難および彼女たちが有する強みを明らかにすることを目的とし、10代女性7名へインタビュー調査を実施した。調査の結果、10代で出産した女性たちにとって、出産直後は不安として認識されていた児の変化は、時間の経過とともに、児の成長を実感する契機や育児の喜びとして認識されていた。また、家族が主な育児支援者であった一方、支援の内容は各家庭の状況によって差が生じており、公的資源の拡充と、既存の枠組みにとらわれない支援の必要性が示唆された。

研究成果の概要(英文)：In this study an interview survey was conducted with seven teenage women to reveal the process by which women who give birth as teenagers become mothers and to clarify if it is a year of child rearing, the difficulties involved in child rearing, and the strengths possessed that helps shape teenage women with newborns into mothers. The survey found that the teenage mothers who gave birth as 17-19 years, and who initially perceived the changes in their newborns as a source of anxiety, gradually perceived these as opportunities to experience the growth of their babies and began to enjoy child rearing. In addition, while family members were the main source of support for the new mothers, the type of support they received varied depending on the family's situation. It was suggested that public resources should be expanded and support that is not bound by the existing framework is necessary.

研究分野：助産学、母性看護学

キーワード：若年妊娠 若年出産 アイデンティティ 母親役割獲得過程 育児支援

1. 研究開始当初の背景

合計特殊出生率は、1947年の統計開始以来最低となった2005年の1.26以降、2010年1.39、2013年1.43と微増し、20歳未満の人工妊娠中絶率(15歳以上50歳未満女子総人口千対)は2001年の13.0をピークに、2010年6.9、2013年6.6で漸減している。一方、15~19歳の出生率(15歳から49歳までの日本人女性人口千対)は、2000年に5.4、2010年4.6、2013年4.4で経過している。同出生率は1960年4.3、1970年4.5であったことから、合計特殊出生率の増加、人工妊娠中絶率の減少という傾向の中、20歳未満で出産を経験する者は一定の割合で存在していることが分かる。

10代での妊娠・出産については、16歳以上で適切な産科管理がなされていれば成人女性と同様に順調な経過をたどることが多いが、周産期死亡率や低出生体重児の出生頻度は高く(片桐, 2001)、育児技術の習得や出産準備状態に遅れが見られる者、妊娠中の自己管理が良好でない者も少なからず存在する。また、10代で出産する女性は、不安定な婚姻状況や経済基盤、福祉依存率の高さ、教育水準の低さ、相談する家族の不在、地域からの偏見といった社会的な問題点も多く抱えている(河野, 2004; 町浦, 2000)。10代で出産した女性の育児行動については、子どもに対する献身的な気持ちを抱く反面、子どもより自分自身の欲求を優先させる傾向や、母子相互作用を促進する行動の少なさがみられるものの、適切なサポートがあれば成人女性と同様に育児行動がとれる可能性も示唆されている(玉城, 2007)。

E. H. Erikson(1973)は青年期について、身体的成長に伴い心理・社会的にも多彩な変化が生じ、アイデンティティを確立し成人期へと移行する重要な時期と述べている。ゆえに、10代で出産した女性においては、自身のアイデンティティを確立しながら母親役割を獲得することが求められ、同時に二つの課題に取り組む困難さが生じている。妊娠・出産を機に学業を中断する者や、同世代の友人に対し距離感をおぼえ孤立しがちな者は多い(町浦, 1999)が、10代女性は自らに母親役割を課し、母親として他者と関わっていくことにより母親としての自己認識を深め、そのことで青年期の発達課題を達成していく(大川, 2010)。平山(2008)は、子育てに伴う自己、つまりアイデンティティの再編成やその状態について研究を重ねることはそのまま母親理解につながり、そこから得られる子育て支援への知見は多いと述べる。したがって、アイデンティティの観点からも10代女性を理解しようと試みることは非常に有用である。

10代での出産に関する取り組みはこれまで、その予防について目が向けられることが多く、海外と比較すると彼女たちへの支援が充分なされているとはいえない(安達, 2008;

大川, 2009)。また、先行研究は多くが妊娠期もしくは出産から退院までを扱ったものであり、育児が本格化する退院後や1ヵ月健診以降も縦断的に行われた調査は数少ない。

そこで本研究では、10代女性が妊娠・出産・育児の経験を通じ、母親役割を獲得しながらアイデンティティを確立していく過程を「母になるプロセス」と定義し、その経時的变化を質的・記述的にとらえていく。彼女たちが抱える困難のみならず強みにも目を向け、多面的な理解につとめながら、母子ともに健やかに成長・発達していくための支援方法を考察していく。

2. 研究の目的

本研究は、10代女性が、妊娠・出産および産後一年間の育児を通じて、母親役割を獲得しながらアイデンティティを確立するプロセスを、質的・記述的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 研究対象者

研究対象者は、妊娠判明時に15歳以上19歳未満であること、重篤な合併症を有さない妊娠22週以降の初産婦であること、本人に妊娠継続と出産・育児を行う意志があること、数回のインタビューが可能であること、研究の参加に際して保護者からも同意が得られることを条件とした。なお、義務教育期間中の者は除いた。

(2) 調査方法・手順

妊娠期と産後1・3・6・12ヶ月時点でのインタビュー調査を行った。インタビューは、インタビューガイドを用いた半構成的インタビューとし、研究対象者の同意を得た上で、ICレコーダーに録音した。また、インタビューは研究対象者の希望するプライバシーの確保が可能な場所で行い、1回のインタビューは1時間程度とした。

(3) 分析方法

インタビュー内容より作成した逐語録を繰り返し精読し、語られた内容に親しんだ。その後、逐語録における冗長な表現を省き、研究対象者が意図したままの表現となるよう留意しながら、整文化した記述を作成した。整文化した記述は、意味のまとまりごとに要約し、すべてをコード化した。作成したすべてのコードは、類似性や相違性を比較しながらまとめ、抽象度を上げてサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。分析過程においては、助産学研究者とディスカッションを行い、分析の精度を高めるようつとめた。

(4) 倫理的配慮

所属機関における研究倫理委員会の承認を得てから調査を開始した。また、研究対象者と保護者に対し、研究の主旨、個人情報の

保護、匿名性の保持などを書面と口頭で説明し、双方の同意を得た上でインタビューを実施した。

4. 研究成果

以下に、研究対象者の属性を示す。また、インタビュー内容の分析結果は、妊娠期と産後1年間の時期とに分けて述べ、考察と今後の展望について論じていく。なお、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは< >、得られたコードは〔 〕を用いて示す。

(1) 研究対象者

研究対象者は、女性7名であり、妊娠が判明した時点での年齢は17~19歳であった。全員が初産婦であり、合併症の発現なく妊娠が経過し、経膈分娩にいたった。研究開始時における研究対象者の最終学歴は、高校を中退した者が2名、通信制の高校に在籍している者が1名、高校を卒業した者が2名、大学を中退した者が2名であった。

妊娠を機にパートナーと入籍をした者は4名、未婚のまま出産し子を養育している者は3名であった。研究期間を通じ実家で生活していた者は3名、入籍や出産後に実家近隣で夫・子どもと3人で暮らすようになった者は4名であった。

(2) 10代で妊娠した女性たちにとっての妊娠期

10代で妊娠した女性たちは、月経の遅れや身体の変化によって妊娠に気づき、病院を受診したり、家族やパートナーに相談したりすることで、予定外の妊娠へ対処していた。そして、自身のライフプランと胎児の命との間で心が揺れ動きながらも、最終的に出産することを選択していた。妊娠期間中は、見知らぬ人からの批判的な言葉や視線を受けることもあり、妊婦らしさについて考えながら、周囲と自分とを比較していた。同時に、日々の生活に規則性を取り戻したり、出産に向けての体制を整えたりしながら、出産と育児に向けた準備を行っていた。また、実母やインターネット上でのつながりを情報源とする一方で、妊娠期間中に利用できる制度の認知度は低く、手続きの煩雑さも相まって、利用のしづらさを感じていた。

妊娠期における彼女たちのアイデンティティには、【母親としての自分をデザインする】と【自分のキャリアをデザインする】が見出された。【母親としての自分をデザインする】は、〔子どもの夢を応援するために親としてがんばりたい〕や〔子どもがしたことを、笑って許せる余裕を持っていたい〕などのコードから成る<自分なりの母親像を思い描く>、〔家族3人で出かけることが楽しみ〕や〔こういう服を着せてあげたいとか、こういうことをさせてあげたいとか、子どもに対しての夢が広がる〕などのコードから成る<子どもとの暮らしを思い描く>、〔けじ

めがつけられる人に育ててほしい〕や〔気配りができる子になってほしい〕などのコードから成る<子どもへの希望を抱く>のサブカテゴリーが含まれた。【自分のキャリアをデザインする】は、〔落ち着いたら働こうと思う〕や〔ずっと憧れている保育士になりたい〕などのコードから成る<職に就く>、〔高校の単位を取ることが出産の条件〕や〔出産後、通信制の学校に入学する〕などのコードから成る<学業を再開する>のサブカテゴリーが含まれた。

(3) 10代で出産した女性たちにとっての産後1年間

産後の育児が開始して間もない時期、10代で出産した女性たちは、授乳や新生児の泣きといった初めての体験に驚き、時に困惑しながらも、一つ一つへ真剣に向き合って対処方法を模索していた。そして、こうした試行錯誤と経験の積み重ねが、児のニーズの理解や、児の成長に合わせた育児行動につながっていた。また、次第に自分なりの育児方法を見つけ、子どものいる暮らしのリズムを作り出すようになっていた。

産後は、学校・職場・居住地などの環境やパートナーとの関係性に変化が生じており、そうした変化に富んだ一年間は、<必死で、あつという間だった>ものとして経験されていた。彼女たちにとって、育児は【楽しさと大変さが入り混じる】ものであり、<親としてのあるべき姿>を意識するからこそ、<理想と現実との乖離>も生じていた。また、未婚のまま出産し子を養育している10代女性は、【シングルマザーとしての子育て】も経験していた。進学や就職先において<1人で子どもを育てていると周りに伝える>ことで、他のシングルマザーとの出会いがあり、妊娠期から抱いていた<孤独を感じる>ことは幾分和らいでいた。

子育て支援センターや保育園を利用する者もいたが、彼女らに認知されている社会資源は健診や予防接種が主であり、育児をする上で支えとなっていたのは、実父母や祖母、夫、友人、職場の同僚であった。10代で出産した女性へのサポートに望むものとして挙げられたのは、<利用しやすい一時預かりサービス>や<学校に併設される託児施設>の他、<ママ友づくりの機会>やパートナーが父親になるための<夫への指導>、〔若いママだからといって、偏見の目で見ないでほしい〕という<若いママの受け入れ>であった。

産後1年経過した時点において、10代で出産した女性たちのアイデンティティには、【母親である自分】が加わっており、そこには<子どもが暮らしの主軸になる>、<他者から母親として扱われる>、<子どもの成長を感じる>などのサブカテゴリーが含まれていた。妊娠期に引き続き導出された【母親としての自分をデザインする】のカテゴリー

には、〈自分の時間を持つ〉というサブカテゴリーが新たに含まれていた。

《考察と今後の展望》

本研究の対象となった10代女性たちは、先行研究と同様、妊娠をきっかけとした学業の中断や、社会からの偏見を経験していた。10代で妊娠・出産する女性を取り巻く課題が山積していることは明白であるが、それに加え、シングルマザーとして育児をする者には固有の困難さも生じていた。

妊娠期のインタビューからは、予定外の妊娠に戸惑いながらも、出産に向け様々な調整を図る10代妊婦の姿が明らかとなった。また、彼女らはどんな母親になりたいのか思索するとともに、就職や進学も視野に入れ、新たなアイデンティティを形成しようとしていた。したがって、10代で出産する女性への支援に際しては、こうした母親として自律しようとする姿勢を尊重し、関わるのが重要だといえる。

産後のインタビューからは、出産後に生じた環境やパートナーとの関係性の変化を受け入れながら、新たな場において母親である自分として身を置く様子が明らかとなった。さらに、出産直後に不安として認識されていた日々の児の変化は、時間の経過とともに、児の成長を実感する契機や育児をする中で喜びとして認識されるようになっていた。また、家族からの育児支援がもっとも心強いものとして認識されていた一方で、どれだけの育児支援が得られるのかは各家庭の状況によって差が生じており、それによって育児負担感に高低が見られた。核家族化やライフスタイルの変容が進む中、母親と家族の力だけで子育てをすることには限りがある。だからこそ、公的資源の拡充と利便性の向上はもちろんのこと、既存の枠組みにとらわれない支援を構築していくことも必要である。

近年の子育て支援においては、親が親として育つよう、親の人生そのものを支援する生涯発達支援の姿勢(丸谷, 2014; 田中, 2011)が重要視されている。子を育てる者自身が、親として育つ過程を支援することは、子どもの健やかな成長・発達と同時に、次世代を担う子どもがより良いロールモデルを得ることへとつながる。個と母、2つのアイデンティティを調和させ統合していく過程では、誰もが葛藤を経験する。個としてのアイデンティティを確立している最中の10代女性たちにとってその過程は、なおさら容易なものではない。年齢や婚姻状況に左右されず、自分らしさを大切に育児ができる社会は、互いの多様な生き方と価値観を受け入れ、すべての母子と家族が健やかに暮らせる社会に違いない。10代で出産した女性たちが、育児での経験一つ一つへ懸命に取り組んだように、支援にあたる者や社会も、積み重なった課題一つ一つと真摯に向き合い、解決に向けた取り組みを実践し続けることが求められる。

《引用文献》

安達久美子(2008). 我が国の10代出産の動向と諸外国の現状. 思春期学, 26(1), 123-128.

E. H. Erikson . 岩瀬庸理 訳(1973). Identity Youth and Crisis. アイデンティティ 青年と危機. 166-177, 金沢文庫.

平山敦子(2008). 子育て期女性のアイデンティティに関する研究の展望. 家庭教育研究所紀要, 30, 200-208.

片桐清一(2001). 若年妊娠の社会的背景とその支援. 周産期医学, 31(6), 745-748.

河野美江・戸田稔子・細田眞司(2004). 10代で出産した母における心理社会的困難性. 心理臨床学研究, 22(1), 83-88.

町浦美智子(1999). 10代妊婦の主観的経験 - 妊婦としての生活の受け入れ -. 思春期学, 17(2), 240-245.

町浦美智子(2000). 社会的な視点からみた十代妊娠 - 十代妊婦への面接調査から -. 母性衛生, 41(1), 24-31.

丸谷充子(2014). 子育て支援における親の生涯発達支援の意義 - 親としてのアイデンティティの統合 -. 浦和大学 浦和短期大学部 浦和論叢, 50, 133 - 147.

大川聡子(2009). 10代の子育てをめぐる家族の調整 - アメリカ、イギリス、日本の社会構造の比較を通して -. 立命館産業社会論集, 45(1), 207-228.

大川聡子(2010). 10代の母親が社会化する過程において顕在化するニーズ. 立命館産業社会論集, 46(2), 67-88.

玉城清子・上田礼子(2007). 若年母親の新生児に対する知覚と育児行動. 沖縄県立看護大学紀要, 8, 9-15.

田中麻里(2011). 日本における子育て支援施策の変遷 「エンゼルプラン」から「子ども・子育てビジョン」まで . 西九州大学子ども学部紀要, 2, 77-85.

5. 主な発表論文など

〔学会発表〕(計2件)

Kiyo Sakamoto, Kumiko Adachi : New identity formation in women who give birth in their teens, The 20th EAFONS, 平成29年3月9日, Regal Riverside Hotel(Hong Kong, Shatin)

坂本希世: 10代で出産した女性への支援 - 2002年から2013年の国内文献レビューを通じて -, 第29回日本助産学会学術集会, 平成27年3月28日, 品川区立総合区民会館 きゅりあん(東京都・品川区)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

坂本 希世(SAKAMOTO, Kiyo)

宮城大学・看護学群・助教

研究者番号: 70723980